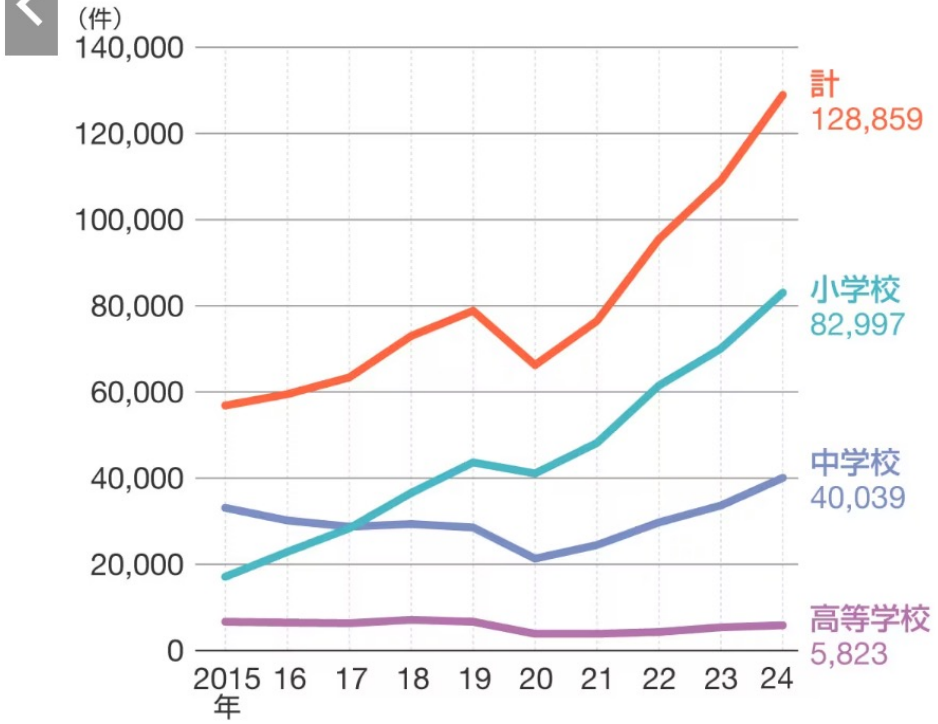


新 廉 塾

福山平成大学
小川 長

その二

暴力行為発生件数の推移



(出所) 文科省「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」を基に東洋経済作成

児童生徒の暴力事件は過去最多

- 文部科学省が10月に公表した「児童生徒の問題行動・不登校等に関する調査（2024年度）」によると、全国の学校で発生した暴力行為の件数は12万8,859件（前年比18.2%増）と過去最多を記録した。
- なかでも小学校は8万2,997件（同18.6%増）と急増し、子ども同士のトラブルだけでなく、教師への暴力も目立っている。
- 「不登校の増加」は毎年のように取り上げられるが、「暴力の右肩上がり」は十分に語られていない。背景には、しつけ不足というよりも、社会全体に広がる「叱れない構造」がある。

- 今、多くの教師は、指導そのものよりも「指導がどう受け取られるか」を恐れている。子どもに強く注意しただけで「不適切指導」とされ、軽く腕をおさえただけでも「体罰」と認定される。
- その一方で、子どもが教師を蹴ったり殴ったりしても、「発達特性がある」「家庭に事情がある」といった理由で、教師の側だけが「黙って耐える」ことを求められる。子どもの側にはほとんど公式な責任が問われない。この不均衡が、現場の抑止力を奪っている。
- 教師だけが常に責任を負い、子どもには「大人は最後には謝るし、守ってもらえる」というメッセージが届く。こうなると、教室から「これ以上はやってはいけない」という線引きが消える。大人が制度的に口を閉ざされている。

- 学校の外でも、同じ構造が見られる。公共の場で子どもが騒いでも、親がまったく注意せずスマートフォンを見続けている光景は珍しくない。なかには「自由」をはき違えてあえて止めない親もいれば、自分だけは「物わかりのよい親」でいたい人もいる。あるいは、そもそも子どもに無関心な親もいる。
- 「叱らない育児」や「個性尊重」という言葉が流行する中で、「ここまではしてはいけない」という線を家庭で体験しないまま育つ子どもが増えているのが現場の実感だ。
- 子どもは摩擦を通して社会性を学ぶ。摩擦そのものを避ける大人のもとでは、「自分の欲求はいつでも最優先」「相手が嫌がっても止める人はいない」と世界を理解してしまう。これが学校での突発的な暴力や言葉の攻撃性につながる。

- さらに深刻なのは、暴力的な親の存在だ。怒鳴る・おどす・見下す・責め立てるといった「言葉の暴力」が家庭で日常化していると、子どもはそれを人間関係の基本形として模倣する。
- 学校で気に入らないことがあると、すぐ同じ調子で友達や教師にぶつけてしまう。暴力は遺伝ではなく、「関係の模倣」によって再生産される。つまり、「大人が未熟なまま親になった」結果が、そのまま学校に流れ込んでいる。
- 「然るべき時に叱れない大人」と「理不尽に怒り散らす大人」。この両極が共存する社会では、子どもは「どこまでが許されるのか」という境界を学ぶ機会を失う。
- 叱るとは、子どもを抑圧することではなく、人としての線引きと他者への配慮の仕方を教えること。これを伝える大人が減れば、学校の暴力は減らない。

- 今回の調査でとくに注目すべきは、小学校での暴力行為が8万2,997件と全体の約3分の2を占めていることだ。
- 文部科学省の統計をさかのぼると、小学校と中学校の1,000人当たりの暴力行為発生件数は2020年度を境に交差している。それ以前は中学校の件数が上回っていたが、以降は小学校が逆転し、差は年々拡大している。
- つまり、今の日本の学校では「暴力の低年齢化」が進行している。これは単なる数字の入れ替わりではなく、社会全体の抑止力が崩れた「構造転換」を示している。
- 叱る大人がいない社会では、子どもが「悪いことをしたら叱られる」という当たり前の構造を学べません。叱られて悪いことをやめようとする子どもに暴力が横行することは、本来あり得ない。

- 「暴力が増えた」のではなく、「暴力を止める力が育つ前に、社会に出てきてしまっている」。本来その抑止力を育てるべき大人——教師や親、地域の大人たち——が、責任を恐れて沈黙している。これが現在の悪循環だ。
- 叱られる経験は自由を奪うものではなく、「他者と共に生きるための線」を学ぶ機会である。叱られずに育つと、自由は際限なく広がるように見えて、実際には人と深く関わらず、結果的に孤立する。
- だからこそ、子ども時代に「ここまではOK、ここからは人を傷つける」を丁寧に体験させることが、長い目で見て子どもを守る教育になるのである。

CNNニュース

- 英ケンブリッジ英語辞典は18日、2025年の単語に「parasocial（パラソーシャル）」を選んだと発表した。
- パラソーシャルは、知人でない相手や人工知能（AI）とつながっているという感覚を表す単語。1956年にテレビ視聴者と出演者の間で形成される関係を表す言葉として社会学者のドナルド・ホートンとリチャード・ウォールの両氏が作り出した。
- その現象は現代も続いている。SNSユーザーは、個人的関係をもたないセレブやインフルエンサーなどとの間でパラソーシャル関係を築いている。典型的な例としてケンブリッジ辞典が挙げたのは、米歌手テイラー・スウィフトだった。スウィフトは今年、NFLのスター選手トラビス・ケルシーとの婚約を発表。大勢のファンが、一度も会ったことのないこのカップルを心から祝福した。

CNNニュース

- もう一つの例として、英歌手リリー・アレンは最新アルバム「West End Girl」の破局をテーマにした歌詞で、「彼女の恋愛関係に関するパラソーシャルな関心」をかき立てた。この単語の使用が今年に入って増えたのは、「ChatGPT」のような対話型AIとの関係にまつわる懸念が浮上したのも一因だった。
- ケンブリッジ大学のシモーヌ・シュナル教授は「多くの人がインフルエンサーとの間で不健康かつ強烈なパラソーシャル関係を築く時代に入った」と指摘。「そうした人たちは、パラソーシャルな絆ができた相手を『知っている』という感覚を持つようになり、その相手を信頼して極端な忠誠心を抱くことさえある。だがそれは完全に一方的だ」と話している。